◆書　評◆

# 倉坂秀史 著『エコロジカルな経済学』,『環境政策論』

竹　内　憲　司（神戸大学）

「環境を守り，豊かさも実現」．どこかの政治家のポスターで見たような文字の躍る帯にくるまれた『エコロジカルな経済学』を見て，やる気が失せそうになったが，引き受けてしまった以上は仕方がない．以下は，倉阪秀史氏の近著2冊についての書評である．

**倉阪秀史『エコロジカルな経済学』ちくま新書，2003年**

「環境経済学」と「エコロジー経済学」の対立ほど，不毛なものはない．日本国内では環境経済・政策学会が良い意味でのいい加減さを維持しており，こうした対立は顕著ではないが，海外における環境資源経済学会と国際エコロジー経済学会という2つの潮流の対立は，本当に不毛である．実際のところ，具体的な政策レベルではどちらの立場も同じようなことしか言っていない（税をかけろ，とか）のだが，その対立は激しい．先日もわりと党派色の薄かったはずのRESECONというメーリングリストで，ハーマン・デイリーの新著の宣伝文が流れたのをきっかけに，それに含まれていた主流派環境経済学に対するうすっぺらな批判が感情的な反論や再反論の連鎖を呼び，悲しくなるような資源と時間のムダが起きていた．

無益な対立の原因ははっきりしている．お互いがお互いの方法論の有益さを認めないからである．敬意の欠如は，環境経済学側に市場的解決への過信があったり，エコロジー経済学側に軽率な環境経済学批判（学部生向け教科書の最初の方に載っている概念図を取り上げて批判するような態度）があったりすると，加速する．実際のところ外部性の内部化論で何でもうまく分析できると信じている「環境経済学」者なんて，あまりいないだろう．そもそも市場メカニズムの万能性を信じている「経済学」者だって，あまりいないのだ．ゲーム理論や経済心理学が大きな力をつけつつあるのは，伝統的な価格理論だけでは分析できない現象に切り込もうとする努力の結果である．かといって，軽率な価格理論批判をするゲーム理論家や経済心理学者を，私は知らない．

「環境経済学」と「エコロジー経済学」の学術面での大きな違いの1つは，唯物論的かどうかという点にあると思う．つまり唯物論的な立場をとるのがエコロジー経済学であり，そうでないのが環境経済学である．だからこそエコロジー経済学は，究極的な資源制約を強調し，その枠内に収まるような経済活動の実現を論じる．確かにわれわれが暮らす地球環境には物理的な制限があり，どんな経済活動もこれを超えることはできない．これは，客観的な事実だ．しかしこの「究極的な資源制約」というのは一般に定義が難しく，決めようとすると結局は人間の価値判断が入ってくる．もし人間が1人も住めなくなるような汚染状態を究極と考えるのであれば，その究極がやってくるのははるか遠い先のことだ．そんなことを心配しても，明日あさっての政策にはあまり関係がない．現在を「究極的な資源制約」に直面した状態と定義するのであれば，そのような価値判断を社会の多くの人がおこなっているという前提が必要だが，残念ながらそうではない．悲しむべきことであるが，世の中，環境問題をいつも気に掛けている人ばかりではないのである．やはり，「どれだけ環境を保全するか」を考えるにあたって人々の価値観を無視することはできないし，環境保全をおこなうのにも費用がかかるのである（もちろんマイナスの費用で

環境が改善できるケースがあることも確かだが，いつもいつもそうとはいかないだろう）．

超長期的な環境問題の分析を得意とするエコロジー経済学のアプローチには，明日あさって使えるような政策手段の議論は少ない．本書で政策手段としてたびたび取り上げられている環境税の話は，主に環境経済学が発展させてきた議論である．自然科学的知識や政治的決定で外から与えられた環境目標を，いかにインセンティブを発揮させながら達成するかという話も，ボーモル・オーツ税や排出権取引をはじめとしてこれまでたくさんおこなわれてきた．長い時間軸を持つ問題に費用便益分析を当てはめることの限界も，古くから指摘されている．さらに言えば本書の「環境も経済も良くなる」という議論は，経済が生産可能性フロンティアの内側にある状態からフロンティアへと接近することを言い換えたものに過ぎない．それらをあたかも「エコロジカルな経済学」の成果であるかのように書くのは，詐欺的と言えるだろう．

一方，エコロジー経済学的な発想と深い関連を持つ，おもしろい分析ツールや元気が出そうな政策手段もある．エコロジカル・フットプリントや，エコマネーといったものだ．本書は残念ながら，「環境経済学」の枠組みの解説とその批判にばかり熱心で，そうしたおもしろい話はあまり出てこない．かわりに出てくるのは，資源生産性あるいは費用効果分析の焼き直しであるエコ効率や，ほとんど誰も読んでいないとも言われる企業の環境報告書の話である．どうも本書のこのあたりを読みすすめていると，私が気にしている環境経済学とエコロジー経済学との無益な対立構造に，著者は実は無自覚であり，世間受けしそうな話をただ並べているだけなのかもしれないとも思う．前段落で述べたとおり，本書の議論のほとんどは主流派の環境経済学を限定的に使ったり，言い方を変えただけのものだから．だとしたら，まじめに批評するまでもない．初学者が本書を真に受けて，低レベルの抽象的な経済学批判や環境経済学批判に時間を費やしてしまうのを心配するのみである．

環境経済学もエコロジー経済学も，環境問題の理解や環境政策の発展に役立つことは確かである．お互いが良いところを認め合い，それぞれが世の役に立つようがんばれば良い．リチャード・ノーガードの「概念的多元主義」が言うように，世界を認識する方法にはさまざまあるが，そのどれもが的を射る部分も，限界も持っている．多元性に対して敬意を払うことこそが学術の発展を保証し，環境問題という多様なアプローチの協力が必要なトピックの研究を，豊かにするはずだと思う．

**倉阪秀史『環境政策論』信山社，2004年**

環境行政に関わった人間が書いた環境政策の書として私が好きなものに，橋本道夫『私史環境行政』朝日新聞社，同『環境政策』ぎょうせい，がある．行政官としての信念や，被害者，産業界，政治家，科学者，さまざまに錯綜する利害をどう考慮しどう決断するかという行動のありさまが如実に伝わってくる良書である．なぜこれらの本がおもしろいかというと，結局，つきつめて考えた人間の心の動きがそこにあるからではないだろうか．

倉阪秀史氏による『環境政策論』は，よくまとまっている．歴史的には江戸時代から現代まで，範囲的には環境基本法から各種リサイクル法まで，ほぼすべてを俯瞰している．政策手段として経済的な手段や情報提供型の手段にも触れており，今後の環境政策にそれらが組み込まれていく可能性も展望できる．だから本書の内容自体に特に文句はない．これはこれで良いのだろう．しかし，何かまとまりすぎている．そのために私は落ち着かないのだ．確かに広範囲のことは知ることができるけれども，新たな問題の芽を発見したり，新たな事態が発生したときに柔軟かつ即座に対応したり，利害を調整するだけでなくひっかきまわしたり，そういった身のこなしのヒントになるような部分は，本書にはない．そんなことは本書の目的ではないと言われてしまえばそれまでなのだが，今の時代，環境行政に関わる人に求められるのは，そのような知恵ではないかと思うのである．

たとえば著者は環境影響評価法の策定に関わったそうだが，これだけでも一冊の本にな

るはずである．そもそも1972年に閣議了解となった経緯は，何だったのか．本書では「想定できる」とか「あっただろう」といった憶測めいた記述がほんの少しあるだけだ．しかし，閣議了解になった経緯（もっと言えば閣議了解という不十分なものにしかならなかった経緯）を，丹念に議会資料調査やインタビューを重ね，さらに自らの経験とも照らし合わせて書いてしまえば，読み応えは相当に増したのではないだろうか．1997年の環境影響評価法制定においても，本書で1ページにまとめられているよりもっと複雑な確執があったはずである．私が読みたいのは，人間が日々おこなっているもろもろのこと，その1つとしての環境政策なのである．